

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号（二〇一七年三月） 抜刷

# 真宗僧侶の教導職養成

—— 松山忍成講述 『教則三條聞誌』 を手がかりにして ——

新野和暢

# 真宗僧侶の教導職養成

——松山忍成講述『教則三條聞誌』を手がかりにして——

新野 和暢

## はじめに

祭政一致、王政復古の国家形成を目指す明治政府は一八七二（明治五）年に大教院を設立し、「敬神愛国、天理人道、皇上奉戴」からなる三条教則に基づく国民教化に携わる人材として教導職を養成した。大教院の担い手である教導職に補任された僧侶は、三条教則をもとに「説教」したことが知られている。真宗教団は一八七五（明治八）年に大教院を離脱することになったが、その根本には神仏合同のあり方への不満と、三条教則と仏教教理との間にある思想的な問題があったことが知られている。三条教則に関する最新の研究は、三宅守常著『三条教則と教育勅語―宗教者の世俗倫理へのアプローチ―』（二〇一五年六月三十日、

弘文堂）があり、福田義導（真宗大谷派）、千早定朝（法隆寺）、細谷環溪（曹洞宗）ら仏教家の衍義書を取り上げて、仏教教理と三条教則の相克や、教育勅語との関係性に着目する研究に着手している。また、三条教則研究の基礎資料として、仏教家や神道家による様々な衍義書を復刻した『三条教則衍義書資料集』（三宅守常編、二〇〇七年七月三〇日）も公刊されている。<sup>1)</sup>

本論文が取り上げる『教則三條聞誌』（以下、聞誌<sup>2)</sup>）は、真宗高田派の松山忍成（一八二二―一八八二年）による三条教則の衍義書である。『三条教則衍義書資料集』に未収録であるが、東海地方の真宗僧侶に行った教導職の「講究検査」という、教導職の養成にかかる実践の記録であり、教導職養成の一事例という点から見ても史料価値を有してい

る。三条教則を仏教家がどの様に受け入れ、国家的な宗教性を提示していったのかという国家神道論に繋がる議論は、日本近代思想史において重要な論点である。ゆえに、本資料を手がかりにして、神や天皇、国家という概念をいかに理解したのかという思想を明らかにしておきたい。

## 一、『教則三條聞誌』について

『聞誌』は、一八七三（明治六）年七月三・四の両日に、常念寺（松坂市、真宗高田派）で松山忍成（闡教院廓然忍成）が行った説教の記録である。記録者は不明である。記録された年月日は記されていないが、用いられている料紙や筆致から見て、この時期に書かれたことがわかる。講述者の忍成は、住持を務めた真宗高田派上品寺（四日市市）に私塾の「和敬寮」を開いて学徒を教養した、高田派きつての学僧である。一八六九（明治二）年に真宗高田派の鑑学、そして一八七九（明治一二）年に学頭職の講師に任ぜられている。維新の混乱期には、本願寺派の大洲鉄然や島地黙雷らと共に仏教擁護に奔走し、「近代化」の基礎を確立したことで知られている。<sup>3</sup>

『聞誌』の本文冒頭には「権中講義闡教院和上説」とあり、忍成が教導職の職位である権中講義（十級）の立場で説教したことがわかる。教導職とは、明治政府の宗教政策である大教宣布に資するべく始まった、教導職制度を担う「半官半民」の職位である。一八七二（明治五）年三

月、神祇官を引き継いだ教部省は、神道を中心に置いて仏教、儒教を取り込んだ形の国民教化を行い、キリスト教の侵入を防ぐという意図のもと、教導職制度の確立に着手した。僧侶や神職などが大教正（一級）から権訓導（十四級）までの十四の階級（教導職）に任命され、「敬神愛国・天理人道・皇上奉戴」からなる三条教則をもとに教化にあたった。この教導職を統括し、教義の講究、教書の編纂といった業務を扱う組織の大教院が一八七三（明治六）年一月五日に設立された。<sup>4</sup> 執行機関として神道には「神局」が、仏教七宗には各宗の局（「真宗局」「浄土局」など）が設置され、各宗から派遣された者が事務にあたった。それぞれの局に庶務、書籍、講究、編纂、訓導取締、講究者溜、生徒取締、会計などの各課および掛を組織した。真宗は東西本願寺と専修寺（高田派）、錦織寺（木辺派）の四派が合同する「真宗局」ができた。真宗の管長には専修寺住職の常磐井克熙が就任した。管長とは、各宗に所属する教導職を管理する管轄長官の意味であり、各宗の管長を通じて国家が「布教」に従事する者を管理するシステムである。同年一月一日に設立された「真宗局」は、全国を八つの「大学区」に分け、それぞれに「取締」を組織した。東海地方は、愛知県、岐阜県、三重県、浜松県、度会県内の真宗三派が（高田派・本願寺派・東本願寺派）合同し、大教正の常磐井克熙を頂点とした「第二大学区真宗取締」が組織された。教部省、大教院、「真宗局」などからの布達類は、各派本山から末寺に伝達されるものとは別に、各大区「取締」を経由して伝達され、その活動に

についても各大区単位で行われた。これは、大教院の意向によって活動が制限されるということを意味している。実際に、教導職に任命されていない僧侶による説教が禁止され、さらに同年七月一日には、教導職に補任されていなければ住職に就任できなくなった<sup>⑤</sup>。

大教院は、教導職の布教内容を具体化する為、一八七三（明治六）年二月九日に「十一兼題」を、同年十月二日には「十七兼題」をそれぞれ制定し、これらと詔勅の解説によって説教することを教導職に課した。「二大学区」は同年七月、教導職と試補に対して、「十一兼題」に掲げられた題目一つである「神徳皇恩の説」を取り上げた文章を作成し封書で専修寺まで送るよう通達している。<sup>⑥</sup>

教導職の補任方法は、教部省が神官及び僧侶に対して試験を行い、その結果によって等級を定めてから補任されていたが、一八七二（明治五）年八月八日、全ての神官が教導職に補任されることになった。しかし、僧侶は違った。各宗の管長が所属僧侶らを教導職「試補」に任命し、試験を受けさせて等級を決定した後、教導職に薦挙し補任された。<sup>⑦</sup>『聞誌』は、「第二大学区」の真宗四派僧侶を対象とする「講究検査」で行われた「説教録」であり、この検査を経て管長が教導職に薦挙したと思われる。この時の「講究検査」は、一八七三（明治六）年六月二二日、専修寺（三重県津市一身田、高田派本山）内の学寮である「貫練場」<sup>⑧</sup>を「講究所」と改称し開催したのを皮切りに、同年七月一日の青巖寺（津市一志町、高田派）から、約三ヶ月に亘って「第二大学区」内の

真宗寺院を大教正の堯熙が巡化した。忍成の他に、永井泰玄（本浄寺）、柳沢沢超（本願寺派法盛寺）、藤谷祐存（大谷派本統寺）、渥美契誠（大谷派法因寺）ら各派から派遣された随行者がそれぞれの会所で複演などを担当した。専修寺「講究所」での講究内容は明らかでないが、関連する動きとして、同年五月二・二二日に原口針水（本願寺派光照寺）が『古事記』を講義し、その後一三日間に亘って説教した他に、二七日に清井堪靈（大谷派光徳寺）、そして、三重県下の講究検査従事として西本願寺から派遣された堀川観阿（本願寺派）による講義があった。<sup>⑩</sup>堯熙による巡化の日程は次の通りである。

七月一二日青巖寺、同月三・四日常念寺、同月五・六日本宗寺（松坂市・大谷派）、同月七日光明寺（松坂市、高田派）、同月一四日法因寺（亀山市・大谷派）、同月一五日誓昌寺（亀山市、高田派）、同月一六日高田派専修寺神戸別院（鈴鹿市）、同月一七日得願寺（四日市市、大谷派）、同月一八・一九日常徳寺（四日市市・本願寺派）、同月二〇・二二日大谷派桑名別院本統寺（桑名市）、同月二二・二三日法盛寺（桑名市・本願寺派）、八月二五～二七日大谷派岐阜別院（岐阜市）、同月二八～三〇日願誓寺（岐阜市、本願寺派）、同月三〇・三一日高田派名古屋別院（名古屋市）、九月一三～一五日大谷派岐阜別院（岐阜市）、同月一六～一八日願誓寺（岐阜市、本願寺派）、同月一九日善教寺（大垣市、高田派）、同月九・一〇日大谷派赤羽別院（西尾市）、同月一日浄願寺と浄光寺、同月二・一三

日本宗寺（岡崎市、本願寺派）、同月一五・一六日聖眼寺（豊橋市、高田派）、同月一九・二〇日本称寺（浜松市、本願寺派）、同月二三・二四日暮戸会所（碧南市、大谷派）<sup>11</sup>

この時の派出説教は、正信偈和讃を勤めた後に大教正が内陣正面に設置された厚畳で説教した。続いて随行の教導職が外陣の祖師前に高座を設けて復演した。大教院は神道の思想や儀礼を中心に置いていたため、神道儀式を僧侶に強いることもあった。神社で説教する場合は、「開講の祝詞を奏し、教則三条の奉読」するという流れがあり、また、臨済宗の清見寺（静岡市興津、妙心寺派）では、須弥壇上の本尊を隠して説教を行うなどといった事もあったようだが、この巡化では特別な儀式を行うような通達は出されていないようである。賽銭の半額を大教院に納めることの指示があったものの、この説教形式だけを見ると各寺院を巡化する法話の際の宗教儀式は、さほど問題にならなかったかもしれない。

『聞誌』は、三条教則の各項目に説明を加える内容であることから、「三条教則衍義書」の部類に入る。神道や忠孝といった国民道徳概念を説明する中で、仏教的な要素に触れることはあっても、三条教則の説明に終始している。その意味において、仏教の説教でないことは明らかである。ただし、注意しておきたいのは、『聞誌』に記された内容が、説教の全てであったのかどうかは解らないという点である。記録者が、三条教則の説明にかかる部分のみを記し、仏教の論説を省いていたり、この説教が終わった後、席を変えて仏教を語っていたりした可能性も考え

られる。このような可能性を念頭に置く理由は二つある。本資料が手書きによるものであるため、完全な形の資料であるのかどうかという、資料的制約を有していること。そして本論文が、神道的な内容を主たる要素とする三条教則を仏教家がどのレベルで受け入れていたのかという思想的な課題を取り上げているからである。資料的制約については、対校本となる資料が発見されない限り解決することはできないため、これ以上言及できないが、思想的な課題について少し触れておきたい。なぜなら、この説教内容に見られる神道の受容や相克は、本論文が提供する視座の一つであるからである。仏教家の三条教則理解について、三宅守常は次のような分析を提示している。

三条教則に関する神道・仏教は、特に仏教の場合、一部ではあっても自身の仏教的立場を鮮明に打ち出したり、実際には法話のごとき仏教臭が濃厚な説教を行っていた事実も明らかとなった。<sup>12</sup>

教導職は単に国家の教化方針を代弁するのではなく、仏教の独自性を打ち出しながら説いたということであり、それは、三条教則や神道的理解との間にある相克の表出も読み取れるということである。とりわけ真宗は、神仏合同の布教に反対し、一八七五（明治八）年二月に大教院から離脱しているため、思想的な課題を確認しておくことは重要な論点である。

そこで、『聞誌』の「結び」を確認すると、

蚩々民トハ頑愚ノ者ヲ指ス蚩ハヲロカト訓スル字ナリ目ニハ文字ヲ

知ラス故ニ是ヲシテ文明ナラシメント苦心シ玉フト云意ヲ顯ス然リト雖トモトハ上ニ反スル言ニシテ其苦心ノ義ヲモ知ラス維新ノ治定ニ逢フ事ニ驚キ歎キ<sup>14</sup>

とある。もともとは「上に反する」意味を持つ「蚩蚩民」としてのあり方を戒めて、明治維新の意義を知らしめようとする内容であるが、「驚き歎き」と書き記した所で筆が止まっている。法話を締めくくる「結びの言葉」が記されていないため判別は難しいが、そのまま説教が終わっても、その後が続いていたとしても不思議ではないと思われる。しかし、それを判断する材料を筆者は持ち合わせていないため結論は出ない。それゆえ、この法話が持つ意味や方向性を確認して、説教内容との関係を見ておきたい。

ここに、巡化に先立つ同年六月二日、「第二大学区」内の真宗寺院に宛てた通達がある。

時勢ニ達セス驕傲遊惰ニシテ徒ニ光陰ヲ費ヤシ世間ノ誹議ヲ招キ衆人ニ厭惡セラルル者ハ布教ノ道ヲ妨クルコト細小ナラス此ノ如キ者ハ佛祖ノ悪人ト謂ヘシ慨嘆ニ堪ス候 今後取締ニ於テ深ク注意シ当区内各県管下ノ僧侶国ノ為法ノ為各派教正ノ羽翼トナリ布教尽力油断ナキ様致シ度此段論告ニ及候事<sup>15</sup>

布教に従事する教導職に対して、その姿勢や態度を矯そうとする意図が綴られている。教部省は「教法ノ要ハ三條ノ御趣意民心ニ貫徹シ各其職責ヲ盡サシメ罪惡ヲ未萌ニ防クニアリ<sup>16</sup>」という期待を教導職に抱いてい

たことからすると、教導職補任に関わる「講究調査」を見据えた通達なら当然ともいえる内容である。そして大教院の方針を受け入れる根拠は、「国の為、法の為」と、国と仏法を並列に置く真俗二諦の教学項目をもとにして、国家への奉仕を社会的役割と理解していることがわかる。

高田派の真俗二諦論には『高田派御書』（全五帖六十通、明暦三年開板）の冒頭、第一帖第一通に専修寺第十四世堯秀（一五八二～一六六六）による「二諦章」と呼ばれている消息がある。ここには、「世間ニハ王法ヲウヤマヒ、公方ヲアガメ、国主地頭ノ法度ヲマモリ、公役所当ツフサニ沙汰ヲイタシ、主君ニ忠節ヲナシ、父母ニ孝行ヲツクスベシ」と俗諦を説いた上で、「命アランカギリハ、ネテモサメテモ油断ナク南無阿弥陀仏ヲトナフベキモノナリ」とある。この「二諦章」は高田派内で一定の影響力を持つており、専修寺第十九世の円祥（一七八八～一八三七）は一八一八（文政元）年の安居で「二諦章」を解説し、高田派の要綱を講述している。真俗二諦論は、東西本願寺など他の真宗各派のように、「宗風」として真俗二諦論の立場をとっていたのである。「二諦章」には国法を敬うことに加えて、「公方」を崇めることが説かれている。「公方」とは、天皇や朝廷を指す言葉であるが、江戸期には幕府の將軍を指し示した。明治の御一新によって、俗諦の方向を天皇へと再転換させることが、「講究検査」のねらいの一つにあり、抵抗感を感じさせることなく国への貢献を説いた根本には、真俗二諦論



の影響があったと思われる。

このような背景を持つ『聞誌』を考慮するならば、教導職を養成する講究は、三条教則を知らしめることが主眼であったため、三条教則を講義した後に仏説を語っていたとしても、仏教と神道との間にある思想的な課題の考察にはさほど影響はない。記録されている本文には、三条教則が掲げる三つの項目すべてに言及されており、思想的な課題を抽出できる。ゆえに、『聞誌』が持つ制約に縛られる必要はないと思われる。

## 二、神の解釈と忠孝について

『聞誌』に説かれている敬神愛国の理解について確認しておこう。ここでは、真宗にとって扱いが難しい神という概念について説明がなされている。忍成の特徴は、神を限定的に捉えていることである。

「敬神トハ敬神ハ誠敬ノ義アリ畏敬ノ義アリ」と、敬神という言葉には、誠意を持って敬うことの「誠敬」と、畏れ敬う「畏敬」の意味が含まれていることを説明した上で、次の様に神を定義している。

神ハ皇国ノ始祖ヲ指ス言ニシテ天照大神ヲ云ナリ<sup>17</sup>

天照大神のことを神であると具体的に指している。その理由は、「皇国の始祖」であるからである。しかし、この神に対する概念は、ある意味で独特な理解である。なぜなら、『古事記』や『日本書紀』に基づく日

本神話に示されている神という概念は、天照大神に限ったものではないからである。天地万物を創造したとされる伊弉諾尊と伊弉冊尊（諸冊二尊）をはじめ、八百万の神が存在すると考えられている。忍成もその説を否定しておらず、「国ヲカタメ玉フ故ニ開国ノ功ハ此ノ二尊ニアルヘシ」と、諸冊二尊を日本の開国に功績があると認めている。しかし

国ヲ作り玉フハ二尊ニアレトモ皇統ヲ開キ玉フ天照大神ニアル故ニ功ヲ天照大神ニユツリテ天祖開国ト云<sup>19</sup>

と、皇統を開いた功績を最大限に評価して天照大神を「開国の天祖」と呼び、神と断定しているのである。皇統とは、天皇の血統のことであり、「今日ニ至リテ神統相承シテ国ヲ収メ玉ヘハ今上天王ヨリ其モトヘ立モトリテ天照大神ヲ開国ノ祖神トスル也」と、今上天皇（この時は明治天皇を指す）へと繋がる祖神であることから、神であるというのである。要するに、「開国の祖神」として象徴的に神を概念付けるならば、天照大神こそふさわしいとしているのである。王政復古の表象を目指した明治政府が、初代の神武天皇から今上天皇へと繋がる万世一系の歴史観の構築を模索していたように、「今上天皇ニ至ル迄大神ノ子孫相統テ国ヲ収メ玉フ万代无窮ノモトヲ開キ玉フ」と、この歴史観を踏襲しているのである。

実は、この様に神を限定的に捉える定義は、他の三条教則の解説ではあまり見られない。その事についてまず、神道側の視座から同時期に出された三条教則衍義書で確認しておきたい。神祇官や神職を務めた田中

知邦による『示蒙教導三条略弁』（一八七三年一月）には、

敬神とは、神祇を崇敬するの義也。凡神とは、天地人間万物を鑄造化育し給へるの大靈にて、謂ゆる天神地祇なるが、八百万神と申して其数量りなく極りなく座ます仲に、まづ第一に無常至尊たる天祖を崇敬するを主とす。夫天祖天照大神は天神の大御議りを以て天上の大主宰と定め玉ふ。<sup>(22)</sup>

八百万の神を神と認めた上で、天照大神を「天上の大主宰」と呼び、特別な存在に置いている。しかし、この説明に続けて、「次に大國主神は地球中の幽事を総括したまふの大神なり。又産土神は各その土地を分掌し、殊に其氏子を愛護し給ふの大神也」<sup>(23)</sup>と、説明を加えていることからすると、天照大神以外の神々の存在も尊重する並列的な解釈がなされていることが分かる。また、この頃、神道界の中心的人物であった田中頼庸（後に伊勢神宮宮司）による『三条演義』（一八七三年四月）では、

神とは天祖天神を始奉り、総て朝典に列する大小の神祇及土地の産土神氏神等を謂なり。<sup>(24)</sup>

と、諸々の神を神としていることがわかる。つまり、神道家は忍成の説明のような、天照大神に限定する理解を持たなかったのである。

次に仏教側の視点を確認してこう。一八七二（明治五）年に大教院教典局が編集した『諸宗説教要義』という書物がある。これは、「三條教則」そのものを、仏教各宗の立場においてどのようにとくべきかという大綱を示した<sup>(25)</sup>ものである。大教院に参加した七宗（天台宗、真言宗、

浄土宗、禪宗、真宗、日蓮宗、時宗）が、三条教則をいかにして講述するのかというテキストとしての位置づけである。三宅守常は『諸宗説教要義』について、「この各宗門提出の衍義は宗門内においてもある程度は下部まで行っていたようで、例えば真宗の場合、提出したものを『教則大意』と別名し教導の Handbook としている」<sup>(26)</sup>と指摘しており、ここに説かれている解説は仏教各宗の「公式見解」的な側面があり、忍成も当然、参考にしたはずである。しかし、これらには、神を天照大神として特定する表現は見当たらない。例えば、天台宗は次のように神を説いている。

神ハ乃チ神變不測造化自然ノ道無爲ニシテ能ク萬物ヲ化育スル之ヲ神ト云、故ニ此ノ道ニ體スルハ皆神人ナリ、萬國皆神人ナリ、漢土ニテハ造化ノ理或ハ五嶽ノ神三皇五帝ノ廟神等、其理或ハ其徳ヲ以テ稱ス、印度ノ佛モ亦神ナリ、（以下略）<sup>(27)</sup>

と、「化育するもの」を神と定義し、その理解の範囲は広く、仏教の開祖である仏陀をも含めている。その上で、日本の神について触れている。

我朝ノ祕説ニハ恐シクモ萬物皆産靈神ノ賦リ給ヘル處ナレハ、天地人畜ノ根源之ヲ神ト云、故ニ其理ヲ窮ムレハ造化自然ノ理ナリ、其徳ヲ仰ケハ萬物化育ナリ、故ニ顯世ニテハ天照大神在之、幽冥ニハ大國主ノ神在之<sup>(28)</sup>

ここにきてようやく天照大神が揚げられているが、特別視している様子



はなく、出雲大社の大国主命や古代中国の皇帝なども神として並列に置いている。この理解は先に見た神道側の見解に近いが、神仏習合の思想も色濃く出ている。

そして、真言宗では「神ト者心ナリ、心ハ萬法ノ本ニシテ心能ク萬法ヲ生ス、心ヲ離テハ更ニ一法モアルコトナシ、神明ハ我国ノ宗廟萬物ノ根本ナリ、神ヲ離レテ萬物ナク、萬物ノ他ニ神ナシ」とあり、神を「心」と捉えているし、禪宗（五山派）の「神ハ吾カ皇國ノ大祖神ニシテ三才ノ本萬法ノ根ナリ」や、曹洞宗の「上古元神天御中主・尊諸冊ノ二神ヨリ人皇ニ至リ、神武天皇乃至當今ニ至ルマテ、悉ク皆神明不測ノ聖徳ヲ以テ國ヲ創メ民ヲ御シ玉フ」というように、限定的な意味で神を捉えていない。さらに、日蓮宗では「本尊ヲ的立シテ其志ヲ確フシソノ信ヲ決セシム、其本尊トハ何ソヤ、本門ノ教主釋尊是也、直ニ彼ノ天竺ノ釋迦老先生ナル者ヲ指ニ非ルナリ、所謂我毘樓盧遮那遍一切處ト云者ニシテ世ノ所謂造物ノ主ナル者也、竺土ニ在テハ釋迦、支那ニ在ラハ三皇五帝、皇國ニ在テハ宗廟ノ神祇ト現ル」と、天台宗の神仏習合説に近い本地垂迹説によって説明されている。

では、真宗はどのように神を理解したのだろうか。神や天皇をめぐる議論は宗教的な視点においても重要な論点であるが、神について定義したり、説明したりといった言及は『諸宗説教要義』に見られない。神についての説明を加えないまま、直接的に皇統と先祖への崇拜とを結びつけている。すなわち、

天祖開国神孫相承皇統一系天壤ト窮ナク億兆ヲ化生スレバ、吾輩モ亦皇國ノ民神孫ノ裔也<sup>(3)</sup>

と、神を指す概念はあいまいなまま、自らを「神孫の末裔」と呼んでいる。天祖開神、神孫相承、皇統一系、天壤無窮といった言葉を一括りのものとしてとらえているようにも見受けられる。このような真宗による見解は、神祇不拝の教えを有しているがゆえに説明を避けたのか、もしくは、神の定義付けは関心事になかったか、それらの概念を自明のこととして受け入れていたのかもしれない。いずれにしても、こうした神や皇室理解については、説教する者の理解にゆだねられていたと見るべきである。その点を忍成の説で補足するのであれば、天祖は天御中主尊や天照大神のことであろう。また、「神孫」「皇統一系」については、次の様な忍成の説明がある。

皇統一系トハ此神孫ヨリ火々々<sup>マ</sup>出見尊<sup>マ</sup>茅葺不合ニ尊神武天皇ヨリ今日マテ大神ノ血筋ヲ以テ國ヲ収メ玉リ皇統一系ハツグト訓ススブルト訓シテ大神ヨリ今日迄アヒツヒテ天下ヲスベテ収メ玉フト云コト<sup>(3)</sup>

天照大神の孫である瓊瓊杵尊から、その「神孫」（彦火火出見尊と<sup>うがやふきかすのみこと</sup>鷦鷯草葺不合尊）を通じて初代天皇の神武天皇が世に出ることになった。その時から現在まで血筋をもつて天皇が国を統治したことを「皇統一系」と呼んでいる。こうした忍成の説教内容の構成を見ると、『諸宗説教要義』を説教の骨子としながらも、忍成なりの解釈を加えて詳しく解説したものであることが解る。これは、『聞誌』を通じて見られる特

徴であるが、そうでない面もある。

例えば、先に引用した『諸宗説教要義』の眞宗の一節には、「億兆ヲ化生スレバ」とあり、化生という用語が使われている。化生とは、『大無量寿経』に「便於七寶華中、自然化生、住不退轉」<sup>(35)</sup>や「爾時慈氏菩薩、白佛言世尊、何因何縁、彼國人民、胎生化生」とある仏教用語である<sup>(36)</sup>。その仏説を親鸞は『教行信証』の中で、「蓮華より化生して、常に諸仏を見たてまつる」と引いたり、和讃において「仏智不思議を信すれば 正定聚にこそ住しけれ 化生のひとは智慧すぐれ 無上覚をぞさとりける」<sup>(38)</sup>と記している<sup>(39)</sup>。これらの文脈で用いられている化生の意味は、衆生が生まれる四種の形態の一つであつて、浄土に忽然と生まれることや、報土に往生することを指している<sup>(40)</sup>。そして、重要なことは、化生は阿弥陀仏のはたらきによるという点である。眞宗は阿弥陀仏という一仏を本尊とするため、諸仏への信仰を必要としないばかりか、神祇不拝の教義を持っているため、神と仏が習合するという教学を有していない。しかしながら、『諸宗説教要義』に記された眞宗の見解には、神が万民（億兆）を化生するという理解が示されている。つまり、神と仏を同じような位置に置いているということになる。このように何らかの形で「変更」を加えてゆくことは、眞宗の信仰のあり方として、根本に関わる問題であり、特異な例と言える。しかし、こうした神仏の一体性を説くあり方は、三条教則理解の際に初めて出てきたのではなく、これより前の混乱期にも、次の様な考えが見られる。

我宗ニ崇ムル所ノ本尊ハ弥陀如来ト申テ、乍恐皇国天祖ノ尊ト同体異名ニシテ、智慧ヨリ現レテハ天ノ御中主尊ト称シ奉リ、慈悲ヨリ現レテハ弥陀如来ト申シ候。<sup>(41)</sup>

これは、大谷派の学僧、闍影院空覚が起草した、東本願寺法嗣の大谷光瑩による朝廷への「上奏文」の原案である。空覚が一八七一（明治四）年一〇月三日に刺殺された際、その傍らに残っていたとされるため、実際の影響力は不明であるが、ここに語られている神への理解が、阿弥陀仏と「同体異名」と表現されていることで明らかのように、神と仏を一体のものとして捉えている。智慧より天之御中主神が現れるという理解は仏教的ではないことは明らかであり、なぜ一体であるのかといえるのかという根拠についても触れられていない。ただ、こうした教学は近代から敗戦までの間、ことあるごとに用いられてきた説でもある。『諸宗説教要義』で打ち出した、神が万民を化生するという論法は、それを決定づけた見解であつたと言える。

では忍成は、どうだったのだろうか。結果的に彼は、化生という仏教用語を用いなかったし、神と仏を同一視することはなかった。彼の議論の特徴は、仏教と神道の接点を見いだすというよりは、神話や神道的な議論を受け入れていたように見受けられる。例えば、天皇と国民の関係の説明する際に、「天壤トトモニ窮リナク昔シヨリ今ニ至ルマテ兆民ヲ造化シ生成シ玉フ」<sup>(42)</sup>と説いている。「造化し生成」という表現は、先に見た天台宗が「造化するもの」を神と呼ぶ理解や、神道家の田中知邦に

も見られる表現であるが、そもそもここで用いられている「造化」とは、三神（天御中主尊、高皇産靈神、神皇産靈神）が天地を創造したとする「天神造化説」の意味であり、神道的な表象である。この点を田中頼庸の『三条演義』から確認してみよう。

此世界の最初は皇祖三神無始より天地造化の本祖として、世界を鍛造し、神聖を化生し、伊弉諾伊弉冉尊に至りて夫婦の礼を行ひ、神人を産生し、国土万物を發育し、日月風火金水土衣食住等の神より凡て天地の間に有ゆる物事を悉く分掌る八百万神を生給て、各相制し相助けて、四時行はれ、人民万物生々蕃息して、言う神化の玄妙なることを宇宙の生類皆其恩徳を蒙らざる無し。<sup>43)</sup>

この様に日本神話に基づく「天神造化説」が説かれている。忍成は、この神話を念頭に置いていたのである。ただし、一点の違いがある。それは先にも指摘したように、諸神の存在を認めながらも、敬神愛国に説かれる神という概念に限定的な解釈を加えたことにある。神から続く無窮の天皇を、国民の指導者として位置付けて、「皇上ハ今日天王ヲ云」と、「皇上奉戴」の解釈を提示している。ここではさらに、国家が天皇を奉戴する根拠を二つに分けている。一つは、万世一系の皇統の特殊性についてである。「皇国ノ君ハ外国トハ異ニシテ彼レハ其ノ人才ヲ選ンテ國王トシ或ハ戦カツテ國王トナル」と、諸外国の国王即位の背景とは異なりがあると示した上で、「天照大神詔シテ宝祚无窮ト告ケ玉フヨリ以来万世不易ニシテ其徳神皇一ツナリ」と、天照大神が開いた皇統の純粋性

を根拠に置いている。もう一つの根拠は、

君子ハ民ノ父母ナリト云カ如ク万民ヲ撫育シテ文明正大ノ域ニ至ラシメント自ラ是ヲ奮発シ他ヲシテ勉強セシメ玉フ子タルモノ父母ノ重恩ヲ知ラスンハ不可有者也父母トナリ玉フ<sup>47)</sup>

と、天皇を国民の家父長として位置づける見解である。この論理によって、天皇に仕えることを勧めたのである。

以上のような神理解を通じて、直接的な相関関係を持たなかった国家（明治新政府）と国民という関係性に、共通性を打ち出すような敬神論へと論理を展開させてゆくのである。

### 三、国家と国民の繋がり

忍成は国家と国民の繋がりを説明するにあたって、神という概念を用いている。すなわち、「皇国ノ祖神ヲ敬イ国家ヲ愛護スル事ハ皇国ノ民タルモノナクンハ有ヘカラサル」と神を敬って国家を愛護することが「皇国の民」の資質であるという論へと展開させている。その神と民に共通項として提示するチームが、先祖崇拜である。

先祖崇拜を天皇崇拜へと転換させる過程の第一段階として、まず、「民」を定義づけることから始めている。

我輩モ皇国モ皇国ノ民ニシテ神孫瓊々杵尊ノ末裔ナル事ナリトキニ天下ノ人民ハミナ天照大神ノ血統ト云ニハ非ス今日天下ヲ都テ収メ

玉フ天王ノ民トナリタルモノナレハ天祖神孫ノ末裔タル国民ソト云心ロナリ<sup>(49)</sup>

と、どの国民の先祖を辿っても天照大神に繋がる同胞であるというのである。ゆえに、神の民を意味する「神民」<sup>(50)</sup>という概念を国民に冠して、「皇国ノ神民カ神ヲ敬ハスシテハ子トシテ父ニツカヘス臣トシテ君ニツカヘサルカ如クト示ス心ロナリ」<sup>(51)</sup>と、親子の関係を国との関係に置き換えて説明している。先祖崇拜の論理を天皇崇拜へと拡大的に解釈して、その始祖へと繋がる系譜そのものを敬うことを勧める愛国論の根底には、

神民タルモノ大君ノ祖先タル神ヲ敬スヘキ義ヲ顕ハス<sup>(52)</sup>

と、天皇への忠孝と、先祖崇拜との同一性を有していると考ええる立場を根拠に置いている。天照大神への崇敬は「国の主」として崇める皇上奉戴へとつながり、それを先祖崇拜と同一化させる事が国を愛する事へ転換してゆくものと説明しているのである。それゆえ、先祖への崇拜と皇室愛護は同質であると述べている。

皇国ニ生ルモノト何レノ人カ祖先ノ大神ヲ教ヒ皇家ヲ愛護スル心ロナシト云ハンヤ若シ此心ロナキトキハ君父ニモトルヲ乱臣賊子ノ類ニシテ国民トハ申シ難シルハ敬神愛国ノ意ナキモノハ此理ヲ思ウテ深ク慙愧ヲ生シテ自ラ奮發シテ敬愛ノ心ロヲ起スヘナリトナリ<sup>(53)</sup>

乱臣賊子とは、君主に反乱する臣下の事であり、皇室（皇家）を愛護しない者を「国民とは申し難き」と、いわば「非国民」と扱っている。そ

れゆえに、慙愧して敬愛の心へと転じてゆくことを望んでいるのである。親鸞は『教行信証』で、「慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す」<sup>(54)</sup>と引いているが、『諸宗説教要義』で真宗はその点に触れていない。忍成は慙愧について触れてはいるが、親鸞の説を用いずに、「厳肅拝跪」という神道的な理解を用いて説明している。

厳肅拝跪トハ是畏敬ノ義ヲ含ミテ示ス嚴トハヲゴソカ也ツツシムルナリ肅ハツツシム也ヲゴソカ也二字全ク意ハ一ツナリ神前ニ拝跪スルトモ心ロニ実トナケレハ虚礼ナリ皇国ヲ等トハ誠敬ノ義ヲ顕スナリ国家ノ勢ヒヲハカリ国用ヲ海外ニフルワサントスル愛護ノ念アリテ神国ノ栄ヲナスハコレ誠意ヲ以テ敬神スルナリ<sup>(55)</sup>

神の前に跪いたとしても、その心に実がなければ虚礼であるため、誠意を持つて神を敬うことをすすめている。この、「厳肅拝跪」という項目については、『諸宗説教要義』真宗説の中に、「誠ニ神を敬スル者ハ必ス能ク國ヲ愛ス、誠ニ國ヲ愛スル者ハ必能神ヲ敬ス、厳肅拝跪ハ威儀ヲ以テ神を敬スルナリ」<sup>(56)</sup>とある。忍成はこの理解を詳しく説明しているのである。

こうした「敬神」をめぐる議論は三条教則の一項目の「敬神愛国」の解説であるが、第二条「天理人道」の項目へと展開してゆく基礎的な要素として提示されている。すなわち、

天理人道等トハ天理ハ所謂天道自然条理ニシテ人ノナス事<sup>(57)</sup>

と、先の「敬神愛国」の項目では主に神の概念を説いてきたが、打って

変わって人間を課題の俎上に載せて、神や天皇、それに国家的な議論を、現実社会における個人的な実践課題としての「人道」へと下ろしてきているのである。

人道トハ君臣父子等ト五倫ノ要常道ナリ人天地間ニ自ラ天理トシテ五倫ノ常道具シテ君ニ事ルニ忠アリ父ニ事フルニ孝アリ是即チ天然自然ノ固有ノ理ナリ<sup>(58)</sup>

儒教の教えである「五倫五常」を念頭に置いた道德思想を用いて「人道」を解いている。君主に対する忠義と父親に対する孝行を結合させたこの「忠孝論」を、「天然自然」のことであると普遍性を強調する一方で、「固有の理」と、いう特定との立場を示しており、特定の範囲内では適応されないとする論理は、一見して矛盾しているように見える。しかしこの主張は特異な考え方ではなく、「国家神道」や「皇道」といった概念に見られるような、固有性を強調する論理展開である。つまり、君（天皇）に対する忠孝に限っては、日本の固有性として表象する「天然自然」だというのである。そして、この様な儒教の道德観を具えていない者を戒める論を、仏説を用いながら説明している。ここに、忍成の仏教家としての特徴が現れているので、該当箇所を引用しておきたい。

人トシテ天然ト具ツテアル人道ヲ失フテ、君父ニ暴害スルハ人人ナラサル処ナレハ、大経ニハ天地ニ暴逆シ人心ニ随ハズト説キ玉フ、人トシテ人ト心口ナラサル故ニ五惡ヲ作りテ、自作自受シテ自然ニ

三途苦惱中ニ墮スル、是以テ仏ケ人心ニ随ハシムルヲ急務トシテ、大経ニ捨惡持善ヲ念頃ニ教ヘ玉フ、光明大師モ觀經ノ孝養父母ヲ尺スル下ニ、五倫ノ常道ニ背クモノ也、人皮ヲ着タル畜生ナリトハジシメテ、人ノ常道タルヘキヲ教ヘ玉フ、真宗ノ僧侶タルモノ仏祖ノ戒キヤクト云ヒ、今ノ三条ト云ヒ、自ラ天理人道ヲアキラメテ、人ヲシテアキラメアキラカナラスンハアルヘカラス<sup>(59)</sup>

自然に具わっているはずの「人道」を失うことは、『大無量寿經』（大経）に説かれる「違逆天地、不從人心（天地に違逆して人の心に従わず）」にあたることを指摘した上で、五惡（殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒）に直面し続ける人間に対して『大経』は惡を捨てて善を持する（捨惡持善）と説かれていることを取り上げている。そして、光明（善導）大師が『觀無量寿經』（觀經）を解釈して孝養父母を説明する際には五倫五常を用いたと、仏教の立場から「五倫常道」の道德を肯定している。その事を大前提に置いて、仏教の戒律や三条教則を通じて人をしめて諦め顯かにしなければならぬと、「講究調査」に訪れた真宗僧侶に呼びかけているのである。

そして、このような教示は、心のありようのみを対象にしているのではなく、社会との向き合い方にまで及んでいる。「世界モ移リ変リ世ノ風俗モ変化シテ今日ニ繁テハ万国交際ノ時ニ至ル<sup>(60)</sup>」と、幕開けした新しい時代の状況を把らえて、「天理ノ凝滞ナキヲ知ラス旧執ニトトコフリテ動ク事能ハサル頑固ヨリ生スル<sup>(61)</sup>」と、古い考えにとらわれずに行動



する事を求めている。その新しい考えとはつまり、「各々自ラ勉励シテ  
国用ヲタシ人才ヲミカクテナケバナラヌ是ヲ利用厚生ト云士民各々我  
本分ノ職業ヲ守リ富国強兵ノバニ至ラシムルカ是人道タル事ヲ知ルトナ  
リ」<sup>②</sup>とある様に、富国強兵の実現という明治国家の政策実現に向けて、  
それぞれの職域において国家奉仕に励むことを指しているのである。そ  
して、その要求は左記の通りである。

今時ノ僧俗タルモノハ教導ヲ以テ職トスル身ナレハ自ラ其本分ヲ尽  
シテ朝旨ノアル処ヲ知り宗意ヲ研究シテ教道勲説ナルヲ以テ急務ト  
スヘキナリ<sup>③</sup>

と、即ち、教導職に就いた僧侶が進むべき道は、国家（朝廷）の意を汲  
み取った真宗教学を社会に還元させる事であると論しているのである。

## おわりに

ここまで見てきた『聞誌』に説かれている論点を整理すると、おおむ  
ね三つに分かれる。①真宗の公式見解が収録された『諸宗説教要義』に  
説かれている論をベースにしたが、日本神話や神道的な議論を受け入れ  
て、真宗教学でそれを補った。②天照大神のみを神として限定的に扱っ  
て説を提示した。③家庭内の親子関係を国家レベルに押し上げる関係性を  
提示した、という三点である。

この三つのうち、①は教導職の「講究検査」という性質上、当然とも

言うべき内容である。ただし、真宗の公式見解に加えて、自らの説を加  
えていたことは、大教院や真宗の見解に自説を交える余地が残されてい  
たということを意味している。真宗の公式見解で神と仏を同一視してい  
た事に触れなかった忍成による説は、真俗二諦をもとにしていたが、弥  
陀一仏の立場を堅持した信仰の表象であったと思われる。そして、②の  
特徴である神や天皇の理解は、信仰上の問題に通ずる課題である。そも  
そも、三条教則は「国家神道」の範疇にあるが、国家への貢献を決定づ  
ける③の議論へと繋がる前提条件に②の議論を軸に置いている点が『聞  
誌』の骨子である。すなわち、他の衍義本には見られない神へ理解を提  
示しながら国家と国民とを直線的に結びつけるような論理を提供した。  
それは、教導職の使命が、天皇が統治する国家への忠義を世に知らしめ  
ることにあると、直接的に説こうとする姿勢であったのである。

## 註

(1) この他に、羽賀祥二は『明治維新と宗教』（一九九四年一二月、筑摩  
書房）で、神話や神学を用いた「神話的愛国論」と、この時期の政  
策課題である富国強兵との関係で説明する「富国強兵愛国論」とい  
う二つの傾向を指摘している。また、地方における教導職の活動に  
ついては、田川幸生が「明治初期、信濃国長野・筑摩両県の教導職  
活動―活動状況・教諭内容・社会の反応―」（『信濃 第三次』二〇  
〇六年一月）や、藤井貞文による「島根県下に於ける教導職の活  
動」（『神道学 一一一号』一九八一年一月）、「島根県下における



教導職の活動―統一」(『神道学 一一二号』一九八二年二月)、清水秀明による「静岡・浜松両県下における教導職の活動(上)」(『神道学 七五号』一九七三年二月)、「静岡・浜松両県下における教導職の活動(下)」(『神道学 七六号』一九七三年二月)といった論考がある。

(2) 『聞誌』は、縦二四・六センチ、横一七・三センチ、十二丁からなる「講録本」である。引用にあたっては、各丁の右側を「オ」、左側を「ウ」と表記した。本書には、本文頭に「権中講義聞教院和上説」とあるだけで、蔵書印や講演日時などの奥書が無い。本書の前所有者河合利政氏)が、真宗高田派の機関紙である「宗報」「本山報告」とワンセットで入手している。宗報等機関紙には「蔵書印」や、寺院名や住職名の入った領収書などもあったことから、真宗高田派常念寺旧蔵書と断定した。本文に「昨日弁スル通り」とあり、日程が二日間に亘ったことから内容的に矛盾は見られない。この資料の概要については二〇〇四年十月六日の「同朋大学仏教学会例会」で発表した。なお、翻刻したものを本文末に掲載しておく。

(3) 『真宗人名辞典』(法蔵館)や『高田の古徳』(本山専修寺)の松山忍成の項目等を参照した。

(4) 一八七三(明治六)年一月十日、発足当初は元紀州藩邸に設置されたが、同年六月九日に増上寺(浄土宗・東京都)へと移転した。

(5) その後一八七五(明治八)年二月に真宗四派が大教院から離脱し、一八七六(明治九)年三月、基本的な規則である「宗規綱領」を制定し教導職に応じた袈裟制服や教導職の等級を堂班に対配することを決めた。真宗の離脱後、ほどなくして同年五月に大教院が解散した。一八七六(明治九)年二月一日、教導職試補以上に限って僧尼と公認することが太政官より達せられ、教導職制度の強化が試みられたが形式的に存続するに留まり、一八八四(明治一七)年八月一日に制度そのものが廃止された。これによって、住職の任免・教師の等級進退などは宗教各派の管長に委任されることになった。僧侶が住職として補任されるにあたってその資質を兼ね備えていることを宗門が担保する為に採用しているのが教師資格であるが、その

原点を辿ってゆくと、この教導職制度に突きあたるのである。

(6) 『教務局布達書』(光明寺蔵)

(7) 教導職制度の影響は、現代の仏教各派が住職としての資格を宗派が担保する教師という資格に繋がっている。なお、大教院や教導職補任のシステム等については、小川原正道著『大教院の研究―明治初期宗教行政の展開と挫折』(二〇〇四年、八月十日、慶應義塾大学出版会)を参照した。

(8) 当該地域に木辺派所属寺院が存在しないため三派を対象とした。専修寺では一六六六(寛文六)年から安居が始まり、一七九六(寛政八)年に「勸学堂」として学寮が整備され、一八七一(明治四)年に「貫練場」と改称された。

(9) 小妻隆文著『堯熙上人行実』(高田学会発行、一九七五年)及び小妻隆文編『堯熙上人年譜』(専修寺発行、一九六九年)などを参照した。『教務局布達書』(光明寺蔵)と、『堯熙商人年譜』(専修寺発行、一九六九年四月一〇日)などをもとに、原資料が明らかに誤字と判断できるものについては修正を加えた。九月一日の浄願寺は半田市(大谷派)と思われる。浄光寺は特定に至らなかったため『堯熙商人年譜』の表記をそのまま用いた。なお、この巡化期間中の七月一日、伊勢神宮祭主だった近衛忠房が死去したことを受けて堯熙は帰山したため一ヶ月ほど日程が変更されている。堯熙は近衛忠房の第七子(後に有栖川職仁の「御実子」)であるため、忠房は実の兄弟である。

(10) 前掲、清水秀明著「静岡・浜松両県下における教導職の活動(上)」の研究による。

(11) 三宅守常著『三条教則と教育勅語』(二〇一五年六月三〇日、弘文堂)七八頁。

(12) 前掲『聞誌』一二丁オ。

(13) 前掲『教務局布達書』(光明寺蔵)による。

(14) 前掲『教務局布達書』による。

(15) 前掲『聞誌』一丁オ。

(16) 前掲『聞誌』一丁オ。

(17) 前掲『聞誌』一丁ウ。

(18) 前掲『聞誌』一丁ウ。

(19) 前掲『聞誌』一丁ウ。

- (20) 同前。
- (21) 前掲『聞誌』二丁オ。
- (22) 『三条教則衍義書資料集上巻』(三宅守常編、明治聖徳記念学会、二〇〇七年七月三〇日)一〇八頁。
- (23) 前掲『三条教則衍義書資料集上巻』一〇八頁。
- (24) 前掲『三条教則衍義書資料集上巻』一三五頁。
- (25) 『明治仏教思想資料集成第二巻』(明治仏教思想資料集成編集委員会編、一九八〇年六月一〇日、同朋舎出版)四三二頁。
- (26) 『三条教則衍義書資料集下巻』(三宅守常編、明治聖徳記念学会、二〇〇七年七月三〇日)一〇八六頁。
- (27) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二五四頁。
- (28) 同前。
- (29) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二五六頁。
- (30) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二五九頁。
- (31) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二六一頁。
- (32) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二六三、二六四頁。
- (33) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二六二頁。
- (34) 前掲『聞誌』二丁オ。
- (35) 『真宗聖典』(真宗大谷派宗務所出版部、二〇一三年二月二八日)四五頁。
- (36) 田中頼庸が『三条演義』で、「此世界の最初は皇祖三神無始より天地造化の本祖として、世界を鎔造し、神聖を化生し」と用いた例も見られる。この理解については、本文(註42)で引用したが、戸浪裕之「田中頼庸の神道観―『三条演義』(河野博士記念室所蔵)を中心に―」(國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第一号)二〇〇九年、所収)や、徳重浅吉著『維新政治宗教史の研究』(目黒書店、一九三五年)などで彼の「造化説」に対して神道的な議論が起こり、再版にあたって該当箇所を削除していることが指摘されており、神道家の議論は重要な視点の一つであるものの、本論文は化生の概念を論じることを目的に置いていないため、仏教用語に限定したアプローチをした。

- (37) 前掲『真宗聖典』三〇三頁。
- (38) 前掲『真宗聖典』五〇四頁。
- (39) その他に、存覚の『浄土真要鈔』に「あきらかに仏智を信ずるものは化生し」とある。前掲『真宗聖典』七一九頁。
- (40) 『真宗新辞典』(真宗新辞典編纂会編集、一九八三年九月一〇日、法藏館)や、『浄土真宗辞典』(浄土真宗本願寺派総合研究所編纂、二〇一三年三月一日、本願寺出版社)の化生の項目による。
- (41) 『宗教と国家』(日本思想大系五巻、一九八八年九月二二日、岩波書店)二二七頁。
- (42) 前掲『聞誌』二丁オ。
- (43) 前掲『三条教則衍義書資料集上巻』一三六頁。
- (44) 前掲『聞誌』一〇丁ウ。
- (45) 同前。
- (46) 同前。
- (47) 前掲『聞誌』一〇丁ウ、一一丁オ。
- (48) 前掲『聞誌』一丁オ。
- (49) 前掲『聞誌』二丁ウ。
- (50) 神民という漢字の充て方や、天皇と天王とを使い分けながら記述されていることからすると、速記されたメモ書きの部類ではなく、清書された講録本であることが窺える。
- (51) 前掲『聞誌』二丁ウ。
- (52) 前掲『聞誌』三丁オ。
- (53) 前掲『聞誌』三丁ウ。
- (54) 前掲『真宗聖典』二五八頁。
- (55) 前掲『聞誌』四丁オ。
- (56) 前掲『明治仏教思想資料集成第二巻』二六二頁。
- (57) 前掲『聞誌』五丁オ。
- (58) 前掲『聞誌』五丁オウ。
- (59) 前掲『聞誌』六丁オウ。通説を考慮し句読点を付した。
- (60) 前掲『聞誌』八丁オ。
- (61) 前掲『聞誌』七丁オ。

(62) 前掲『聞誌』八丁ウ。  
(63) 前掲『聞誌』九丁オ。

教則三条聞誌〔表紙〕

三條御教則聞誌

權中講義闡教院和上説

### 第一條

敬神愛國ノ旨ヲ体スヘキ事

敬神トハ敬神ハ誠敬ノ義アリ畏敬ノ義アリ神ハ皇國ノ

始祖ヲ指ス言ニシテ天照大神ヲ云ナリ愛ハ愛護ノ義ナリ

皇國ノ祖神ヲ敬イ國家ヲ愛護スル事ハ皇國ノ民タル

モノナクンハ有ヘカラサル故に始ニ此一條ヲ拳玉フ旨トハココロト

訓シウマシト訓スル字ニテ敬神愛國ノ味イヲヨクヨク知ルヘシ

トナリ体ハ体認又体達々知ト熟スル字ニテ体ノ字ニサ

トルト云訓アリ我身ニヨクヨク徹シテ知ラルルヲ云ナリ苟モ

皇國ニ生スル者ハ神ヲ敬ヒ國ヲ愛スルノ心ロナキニアラネ  
トモ其味ヒヲ我身ニ知ラサル故ニ或ハ異神ニ仕ヘ或ハ遊墮  
ニシテ國家ヲ保護スル事能ワサルニ似タル故ニ念頃ニ旨ヲ  
体スヘキトノ玉フ天祖開國ハ天御中主尊ヲ始トシテ天

一丁オ

祖ト訓スル事アレトモ今ハ開國ノ天祖ナレハ天照大神ヲ指スナリ  
諸冊ニ尊ハアメノスボコヲ以テ國ヲカタメ玉フ故ニ開國ノ功ハ此  
ノ二尊ニアルヘシルルニ今大神ノ開國トスルハ云何ト申スニ國ヲ  
作り玉フハ二尊ニアレトモ皇統ヲ開キ玉フ天照大神ニアル故ニ  
功ヲ天照大神ニユツリテ天祖開國ト云今日ニ至リテ神統相承  
シテ國ヲ収メ玉ヘハ今上天王ヨリ其モトヘ立モトリテ天照大神  
ヲ開國ノ祖神トスル也其事ハ古事記等ニ出タル事ニテ神孫

瓊々杵尊ニ詔シテ豊葦原ノ瑞穂ノ國ハ我子孫ノ君

タルヘキ地ナリ<sup>ナンテ</sup>行ヒテ治スベシ<sup>シロシメ</sup>宝祚ノ榮天壤ナカルヘシ

ト告ケ玉フ此ノ詔ニ違ハス今上天皇ニ至ル迄大神ノ子孫

相統テ國ヲ収メ玉フ万代无窮ノモトヲ開キ玉フ故ニ天祖開

國ト云ナリ神孫相承トハ瓊々杵尊大神ノ命ヲ受テ日向

ノ國ヘ天下リ國ヲ収メ玉フ故ニ相承ト云皇統一系トハ此神孫ヨリ

火々出見尊鵠茅葺不合ニ尊神武天皇ヨリ今日マテ

大神ノ血筋ヲ以テ國ヲ収メ玉リ皇統一系ハツグト訓ススブルト

訓シテ大神ヨリ今日迄アヒツヒテ天下ヲスベテ収メ玉フト云コト

大神ノ告ノ如ク天壤トトモニ窮リナク昔シヨリ今ニ至ルマテ

兆民ヲ造化シ生成シ玉フトアリルレハ今日ノ我輩モ皇國モ

一丁ウ

二丁オ

皇國ノ民ニシテ神孫瓊々杵尊ノ末裔ナル事ナリトキニ天

下ノ人民ハミナ天照大神ノ血統ト云ニハ非ス今日天下ヲ都テ

収メ玉フ天王ノ民トナリタルモノナレハ天祖神孫ノ末裔タル國

民ソト云心口ナリ然ルニト云ヨリ下ハ敬神ノ旨ヲ体認セサル天ヲ

拳テ遂ニ体スヘキ云ヘ一心ヲ示スナリ其子孫等トハ何レノ家ニテ

モ子孫タルモノガ父兄ニソムキ臣タルモノカ君ニモトルトキニハ乱臣

賊子ノ名ヲ受テ教法ノ収メサル身トナルト云義ヲ示シテ是ニ例シテ

皇國ノ神民カ神ヲ敬ハスシテハ子トシテ父ニツカヘス臣トシテ君ニ

ツカヘサルカ如クト示ス心口ナリ孝友トハ上ノ父兄ニツカヘル事

ニテ孝ノ字ハ元來老ノ字ト子ノ字トヲ合シタル字ナリ

老タル親ヲ敬ヒ事フル相ヲ顯ス文字ソト説文ノ中ニハ解

シテアリ併シ親ニツカヘル計リカ孝ト云ニハ非ス君臣父子

ホトノ大倫ニソムカス道ニ随フ場ヲスヘテ孝ト云故ニ大学ノ

中ニハ孝ハ君ニツコフマツル云ヘ一心ナリトイヘリ今ハ父ニ孝ヲナス

ニヨセテ神民タルモノ大君ノ祖先タル神ヲ敬スヘキ義ヲ顯ハス

ナリ友トハ人ト相交ルヲ友ト云兄弟ニヨキヲ友トモ名ク此事ハ字

彙ニニ義并ヘ出シテアリ今ハ弟タルモノ兄ニツコフマツル辺ニ約

シテ友ト名ク子トシテ父ニソムキ弟トシテ兄ニヨカラザレバコレヲ

賊子ト云臣ハ君ニ対スレハイヤシキモノ故ニ僕ト云君ハ勝レテ

## 二丁ウ

上ニアル故ニ長ト云悖戾トハ悖ハサコフト訓ナリミタルト訓ス

戾トモトルト訓ス君ノ心口ニサコフ故ニ其サマ狂人ノ如クナル故乱

臣ト變スルナリ人ト生レテ君父ニモトルモノハ神ト云ヒ仏ト云ヒ

何レノ教法ニ於テモイミ嫌ヒ筈ニシテ収サルモノトナリ苟モホト

ハカリソメニモ皇國ニ生ルルモノト何レノ人カ祖先ノ大神ヲ教ヒ

皇家ヲ愛護スル心口ナシト云ハンヤ若シ此心口ナキトキハ君

父ニモトルヲ乱臣賊子ノ類ニシテ國民トハ申シ難シルハ敬神愛

國ノ意ナキモノハ此理ヲ思ウテ深ク慙愧ヲ生シテ自ラ奮發

シテ敬愛ノ心口ヲ起スヘナリトナリ夫誠ニ等トハヨク下正シク

敬神愛國ノ相ヲ示ス誠ニ等トハ誠敬ノ義ヲ挙ルナリマコトトハ

眞実无妄ノ義ニシテマコトト云モノハ元來天理トシテ備ルモ

ノナレトモ未タ眞実ノ場ニ至ル事能ハスシテ道ニソムクモノアリ

故ニ是ヲ実トニスルト云場カ人ノ道ニシテ教ト云愛ト云モコノ

誠ヲ離レテハ実地ニ至ル事アタワス故ニ誠敬ノ義ヲ先キニ挙

## 三丁オ

嚴肅拜跪トハ是畏敬ノ義ヲ含ミテ示ス嚴トハヲゴソカ也

ツツシムルナリ肅ハツツシム也ヲゴソカ也二字全ク意ハ一ツナリ

神前ニ拜跪スルトモ心口ニ実トナケレハ虚礼ナリ皇國ヲ等トハ

誠敬ノ義ヲ顯スナリ国家ノ勢ヒヲハカリ国用ヲ海外ニフルワサント  
スル愛護ノ念アリテ神国ノ榮ヲナスハコレ誠意ヲ以テ敬神  
スルナリ誠意トハ意ノ字ハ心口ノ字トハ違ウテ心口ノ發動シタル  
場ヲ意ト云尔者誠意ハココロハセヲ実ニスルノ義トシテ大  
学ニ其意ヲ誠ニスルモノハ自ラアサムク事ナカレト云自ラアサム  
クトハ善ハナスヘキ事惡ハスツヘキ事ト知り乍ラ惡ヲステサルハ  
自ラ欺クナリ神ハ敬スヘキ事国ハ愛スヘキ事ト知り乍ラ其場  
ニ至ラサルカ自ラ欺クナリト云心口故ニ心口ノ發スル処口末タ実

ナラサルヲ戒メテ真実无妄ノ場ニ至ラシムルヲ意ヲ誠ニスト云  
ナリ其誠意ヲ以テ欺ク事ナク敬神スヘシトナリ此誠意ヲ以テ  
敬神スルカ根モトナリテ拝跪ハ始末ナリ本乱レテ未収リナキ  
如ク一本ノ木モ根本アル故ニ多クノ枝葉ノ末迄養育スル誠意  
ノ本アレハ神ニ向ツテハ相タノ上ノ拝アリ誠意アレハ遊墮ニ日ヲ送  
ルノ義ナケネハ各勉勵シテ国家ヲヨクタモツ愛護ノ働キアリ内  
物産ヲ殖シトハ外国ニ対シテ皇国ヲ内ト云殖ハウユルナリ産物ヲ  
タクハヘテ国家ノ用ヲ具ヘ人オヲ研イテ国用ニ備フ各其職ニ  
依テ愛國ノ働キアルヘシ今且ク能所ニヨセテ物産ヲ殖シト云  
対峙トハ山ノ屹立スル相タニテ平地ヨリ遙ニソハダツタル場ヲ云  
此敬神愛國ノ旨趣ヲヨクヨク体認セハ誠意ヲ以テ国家ヲ

#### 四丁オ

保護シ其ノ愛國ノ情ヨリ遊墮ヲ勵シテ學業勉勵シテ  
頑愚ノ情ヲ去リ知識ヲ開キテ多クノ人オヲ育シ国用都  
テ足スルニ至ラハ万国トカタヲナラフト山ノ平地ヨリソバタツ如ク  
皇國ノ勝レタルニ至ルノ本ヲ立ルヲ今此敬神愛國トスル  
ゾトナリ

#### 第二條

天理人道ヲ明ニスヘキ事  
天理人道等トハ天理ハ所謂天道自然條理ニシテ人ノナス事  
ノ事シテ自ラアルシムル事アルヲ云ナリ併シ天ト云テ別ニ一物ト  
シテ主宰ノアルニアラス仏家テコレヲ談スレハ業道ノ自然  
人道トハ君臣父子等ト五倫ノ要常道ナリ人天地間ニ

#### 四丁ウ

生レテ自ラ天理トシテ五倫ノ常道具シテ君ニ事ルニ忠アリ  
父ニ事フルニ孝アリ是即チ天然自然ノ固有ノ理ナリ尔ルニ人  
其天理ニ嗜クシテ自ラ五倫ノ常道ニ背イテ君ニ事フルニ  
不忠シ父ニ事フルニ不孝アル事皆是天理人道ノ嗜キカ  
イタス処ナリ故ニ第二條ニ於テ天理人道ヲ明ニスヘシト教則  
ヲ立玉フ中庸ニ君臣父子夫婦昆弟朋友ノ交リノ五  
ツヲ天下ノ達道ト定メ是ヲ行フニ付テ知仁勇ノ三ノ達  
德ヲ明云知仁勇トハ外ナラヌ此五倫ヲ知ルヲ知ト云是ヲ

#### 五丁オ

#### 五丁ウ

我身ニ体認スルヲ仁ノ徳ト云此五ツノ達道ヲツヨク勸ルヲ  
以勇トスルナリ此五倫ト三徳トハ人タルモノミナウヘキ道ナリ  
尔レトモ人欲ノ私ニヘタテラレテ達道達徳ヲウル事アタハス

是ヲウルニハ誠ノ一ツヲウルニ非サレハ得サルナリ故ニ中庸ニハ是ヲ  
行フモノ一ツナリト云ヘリ一ツトハ実ヲ云此誠モ又人ノ上ニ天然ト具  
ルモノナレハ実トハ天ノ道ナリト云尔レトモ其実トヲ人欲ニ掩ハレ  
テ顯ハス事能ハサル故ニ是ヲ実ニスル動キカ无クテハナラヌソレ  
是ヲ実ニスルト云カ人道ナリ未タ涅槃ナラサル事能ハサルモノモ  
真実不妄ノ場ニ至ラント欲ス奮発ノ心ロヨク実トヲナス  
ニ至レハ則チ明ニスト云処ナリ中庸ニ実トナレハ則チ明也ト云人ト  
シテ天然ト具ツテアル人道ヲ失フテ君父ニ暴害スルハ人  
人ナラサル処ナレハ大經ニハ天地ニ暴逆シ人心ニ隨ハズト説キ  
玉フ人トシテ人ト心口ナラサル故ニ五惡ヲ作りテ自作自受シテ  
自然ニ三途苦惱中ニ墮スル是以テ仏ケ人心ニ隨ハシムルヲ急

務トシテ大經ニ捨惡持善ヲ念頃ニ教ヘ玉フ光明大師モ  
觀經ノ孝養父母ヲ尺スル下ニ五倫ノ常道ニ背クモノ也人  
皮ヲ着タル畜生ナリトハジシメテ人ノ常道タルヘキヲ教ヘ玉フ

#### 六丁オ

真宗ノ僧侶タルモノ仏祖ノ戒キヤクト云ヒ今ノ三條ト云ヒ自  
ラ天理人道ヲアキラメテ人ヲシテアキラメアキラカナラスンハ  
アルヘカラス生々化々トハ天理ヲ明スナリ生々ハ万物ノ發生スルヲ  
云化々ハ物ノ變化スルヲ云春來リテ樹木芽ヲ生シ夏ニ至  
リテ綠葉繁茂ス秋ニ至レハ其葉黃ニシテ零落スミナ  
是天理ノ凝滯ナク生化スル処ナリ時循テ等トハ人道ヲ  
明ス君ニ事フルトキハ忠アリ親ニ事フルニ孝アリ乃至今日  
万国交際ノ時至レハ信義ヲ失ハス互ニ相通スル是則チ

宜キヲ制スルモノニシテ人タルモノノ常道ナリ如是天理ノ上  
ニモトトコフル事ナクトトコフルトハ物ニ執シテ動ク事ノナラサルヲ  
云春芽ヲ生シタル俛ニテカワル事ナケレハ凝滯ナク五倫ノ間ニ  
於テモ一ツニトコフル事ナキカ人道ノ通達ナリ后生ニ至リテ  
此時運ニ當リテ議スルモノナキカ如キハ天理ノ凝滯ナキヲ  
知ラス旧執ニトコフリテ動ク事能ハサル頑固ヨリ生スル処ナレハ  
アラカシメ其義ヲ示シテ天理人道ヲアキラムレハ天理ノ上ニトト  
コフリナク人道ニ於テモ達セサルナシト示スナリ如是天理ト  
人道ト上來并ヘ明スニ付テ人其ハルカニヘタツモノト思ハシ事  
ヲ恐レテ其揆一ナリト云揆ハハルカト訓シ又コトハリヲモムキト訓シ  
天理人道処ハ二ツアレトモ其コトハリ其ヲモムキハ一ツモノソト

#### 七丁オ

#### 六丁ウ



云心ロナリ人ノ上ニ五倫ノ道アリテ君父ニ忠孝ヲ尽スヘキ  
 コトハリアル場ヲ天理ト云其天理ニ随テ大恩ヲ受タル君父ニ  
 事ヘ奉ル是ヲ人道ト云故ニヲモムク処ハ一ツナリ天理ニ達スル等  
 トハ上ヲ受テ示スモノニテ凝滞ナキ天理故ニ此天理ヲ達得  
 スレハ變通方ナクトテモトテモ變化スルモ万国相通スルモ聊カカド  
 ダツ場ハナヒト云心口通達セサル事ナキ人道ヲ達得スレハ君臣ノ  
 間モ父子ノ間モ乃至朋友ノ間モ道全フシテ孝弟忠信カ顯ルル  
 スレハ此ノ天理人道ヲ弁明セスシテハ叶ヌ夫開國ノ始メ等トハ天理  
 ノ生々化々スル相タヲ示スナリ諸冊ニ尊カ開國シ日尊カ開國シ玉フ  
 時分テハ世界モ人モ人質樸ナル故ニ未タ具ラサル事多シ質樸トハ  
 古ハ朴ニ造ル今ハ樸ニ造ル質ハマコトト訓シスナヲト訓ス樸ハスナヲ

機地白木ト訓スル字ニテカサリケノ无キ有ノ假ニテシカモ実ト  
 アル場ヲ質樸ト云ナリ神代ノ時分ニテハ世モ人モトモニ質樸故  
 ニ政道トテ文辞モ品物モ未タ具ハラスケダシ推量シテミレハ此日  
 本斗リテハナヒ万国モ又此通り然而追々年々立々随ヒテ世界モ  
 移リ變リ世ノ風俗モ變化シテ今日ニ繁テハ万国交際ノ時ニ  
 至ル是春ワスカニ芽生セシモノ夏来リテ繁茂ス如ク生  
 化ハミナ天地ノ理ナリ故ニ等トハ時ニ随ウテ宜キヲ制スル  
 人道ヲ明ス也天理循環シテ万国相通ノ時至レハ此天理ニ随

七丁ウ

ウテ人タルモノハ人道ヲ守リ万国ノ人々ニ対シテモ信義ヲハズ  
 サルヨリ物物定理ヲヨク心得彼國ノ者ハ我ニモトシテ此日本ノ  
 有ハ彼レガナキニ通シテ互ニ相益スルカ人ノ道ナリ人タルモノ

外国ヲ忌嫌テ信義ヲ失ヘハ人情ノ道ニ背キ昔シ万国ニ

通セサル時ノ思ヒヲ以テ今日相通ノトキニ至テ是ヲサマタクルハ

人道ニアラスト云於是乎等トハ此ノ下上ニ述ル義ヲ受テ天理

人道ヲ知ル事ヲ顯スカク天理人道ヲ伺イミレハ今日ノ万国交

際ハ變通无方ノ天理ニ異セサルヲ知ルトナリ自主自養トハ天

然ノ本理カ自ラ主宰トナリ自ラ養育スルト云心ロニテ今日交

際ノトキトナルモ天理カ主トナリ用トナリテ此場ニ至ルソト知ラスル也

八丁ウ

於是乎利用等トハ次ニ人道ヲ知ル事ヲ明ス自主自養ノ天理ヲ

知ラハ人道ノ上テハ各々自ラ勉勵シテ國用ヲタシ人才ヲミカク

テナケネバナラヌ是ヲ利用厚生ト云士民各々我本分ノ職業

ヲ守リ富國強兵ノバニ至ラシムルカ是人道タル事ヲ知ルトナリ

八丁オ

今時ノ僧俗タルモノハ教導ヲ以テ職トスル身ナレハ自ラ其本

分ヲ尽シテ朝旨ノアル処ヲ知り宗意ヲ研究シテ教道勸説

ナルヲ以テ急務トスヘキナリ尔ルニ等トハ天理人道ニ明カナラサルモ

ノヲ挙テ其失ヲ戒テ明ナラシメン義ヲ明ス此時運トハ万国  
交際ノ時ヲ云猶ト云字各々其本文ヲ尽スノ時ナルニヤハリ其  
場ヘ至ラズシテ交際誹議スルモノアリ何故誹議スルゾト其  
人ノ心口ヲ推量シテミレハ旧執ニ泥ミテ知識ヲ開カサルトナリ  
沿襲トハ沿ハシタゴウト訓シテ流ニ随テクダル心口ヲ沿ト云襲ハ  
ツグナリヨル也ナロフ也従前ノサマニ随テ夫レニヨリテアルヲ沿襲  
ト云陋習トハ陋ハミニクシツタナシセマシイヤシキ頑固ノセマキ  
心口ニナレナツミテ固執シテ通スル事能ハサル故ニ心口ヲトヂフサイテ

九丁オ

クニ至ルベシ今日誹議スルモノハミナ私見ニトドコフルヨリ起ルスレハ  
私論ヲ去リテ公論ニツクヘキナリ天地固有ノ公法トハ上ニ示スカ  
如ク変通無方ノ天理君臣父子ノ人道ナリ是カ天地開闢ノ  
始メヨリ固有ノ公法ナレハ天運一変シテ万国相通ノトキ  
至レハ此トキニ乗シテ天然トシテ具ハレル人道ヲ尽シ信義ヲ失  
ハサルカ公法体認スルト云モノ尔レハ勤メテ知オヲ開クヘシ  
勉トハ二字トモニツトムルト訓シテカラノ及フ丈ノ程ヲナスハ勉ニハア  
ラス力堪ヘサルトコロ迄勉強スルニ非サレハ勉ニ非スト云義カ字  
雅ノ中ニ出テアリ拡充トハオシ広メシツト訓シテ壅塞スル  
心口ヲハルヲ云

十丁オ

第三條

アリシヨリ万国交際ノ時運ヲ誹議スル也夫故ニ天理人道ヲ  
明カニセント思ハハトトコフテアル旧執ヲ除イテ知識ヲ開キ知オヲ  
開ケハヨク天理ヲ知ル故ニ何レノ国ノ人ニ交リテモ信義ヲ失ハザル  
人道カ明カニナルゾトナリ日新トハ大学ニ日々新ニシテハ寺云是ハ  
湯之盤ノ銘ニテ湯ヲミスル器ニ書付タル名ニテ自ラ戒ヲナス  
言其ノ身ヲ沐浴シテアカカサルカ如クヨク一日ニテモ旧染ノケカレヲ  
洗ハハ日々々々ニ旧染ノアカヲ洗ウテ新ニセヨト云戒ナリ一度アカ  
ヲ洗ウテ二度洗ウニ及ハスト云義ハナヒ人タルモノハ悪ヲステ善ニ  
元付ニハ一度ニテハトドメズ今日モ悪ヲヤメテ善ニモトツキ明日モ悪  
ヲステ善ニススメト云心ナリ是ヲ日新ノ利ヲ究メ旧弊ニ  
泥ミシモノナレハ今日モ洗ヒ明日モ洗ウテ旧弊ヲ去リテ知オヲ開

九丁ウ

皇上奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事  
皇上ハ今日天王ヲ云何故是ヲ奉戴ストナラハ畧シテ二ツヲ  
云ヘシ先ツ皇國ノ君ハ外国トハ異ニシテ彼レハ其ノ人オヲ選ンテ国  
王トシ或ハ戦カツテ國王トナル今ハ不尔天照大神詔シテ宝祚无窮  
ト告ケ玉フヨリ以来万世不易ニシテ其德神皇一ツナリ尔レハ外  
國ノ帝ト云王ト称スルモノト同実ノ倫ニ非ス故ニ古ヘヨリ今ニ至ル迄  
万臣コトコトク皇上ノ德ニ帰シテ帝位ヲ望ムモノナシ尔者臣民  
タルモノ奉戴セスンハアルヘカラス且ツ又今上天皇ニヲケルヤ君  
子ハ民ノ父母ナリト云カ如ク万民ヲ撫育シテ文明正大ノ域ニ

十丁ウ

至ラシメント自ラ是ヲ奮発シ他ヲシテ勉強セシメ玉フ子タル  
モノ父母ノ重恩ヲ知ラスンハ不可有者也民ノ父母トナリ玉フ撫育

叡旨ヲ奉戴セスンハアルヘカラス朝旨遵守トハ正院ノ御

布令ヲ初トシテ府県ノ布告ニ至ル迄コトコトク朝旨ヨリ出ル  
者ナレハ遵守セスンハ不可有義也セシムヘキトハ他ヲシテラシム  
ルノ義ナリ今此三條ハ神官僧侶ニ対シテ教導ノ基本ト

シテ与ヘ玉フモノナレハ人ヲシテ教ヘテ遵守セシメヨトノ玉フ也ルニ

第三條ノ下ノミセシムタルハ此第三條ニ実着セハ初ノ二條モ  
又具ル故ニ此処ニセシムルヘキ事トノ玉フ初ノ敬神ト云モ今日ノ  
皇上ノ祖先ニシテ王位ノ初ヲ開キ玉フ神ナレハ皇上ヲ奉戴

スルモノ敬神ナクンハ不可有普天卒土ミナ是王土ナレハ皇上ヲ  
奉戴スルモノ愛国ナクンハアルヘカラス義ナリ第二條天理人  
道ヲ明カニセヨトアルモ又是朝旨ナレハ第三ノ朝旨遵守ノモノ

天理人道ニ背カサル事勿論ナリ故ニ第三ノ下ニ至テセシムヘキト

ノ玉フ尔シ乍ラ体スヘキモ明カニスルモ此セシムヘキモ三条互ニ通  
スト知ルヘシ人ヲシテ朝旨ニ随ワシムルノ神官僧侶自ラ天理  
人道ニソムイテ不明ナレハ今教ユルニ益ナシ自ラ敬神愛国ヲ

十一丁オ

十一丁ウ

体セサレハ人ヲシテ体認セシムル事ハナラヌ尔者天下ノ僧侶ハ皆  
教導スヘキノ身ナレハ三條ノ旨ヲ自ラ体認シ三條ノ旨ヲ自  
ラ弁明シ人ヲシテ三條ノ旨趣ヲ得セシムルヲ用トス天運トハ  
天運ノ自然ト云事ニテ第二條ノ下ニ変通方ナクト云開国ノ初  
メハ都テモノ具ラヌ年移ルニ随ヒテ風俗ハ変シ今日万国ヲ  
相通マテ開ケシ事ハミナ是レ天然ノ自運ナリ百度維新トハ  
昨日弁スル通り旧深ヲ洗ウニハ日々新ニシテ又日新也一度洗ウテ

二度セサルハ非ス旧執ノアラン限リヲ洗ウテ民ヲ新ニスル事  
旨趣ナレハ百度維新ナリト云在廷ノ君子トハ太政大臣ヲ  
初メトシ大臣ヲ指ス言朝旨ノアル処ヲ以テ万民ヲ撫育シ  
玉フニ付テノ苦心焦勞ナリ蚩々民トハ頑愚ノ者ヲ指ス蚩ハ  
ヲロカト訓スル字ナリ目ニハ文字ヲ知ラス故ニ是ヲシテ文明ナラシ  
メント苦心シ玉フト云意ヲ顯ス然リト雖トモトハ上ニ反スル言ニシテ  
其苦心ノ義ヲモ知ラス維新ノ治定ニ逢フ事ニ驚キ歎キ

十二丁オ

(以下書かれていない。)

『教則三條聞誌』個人蔵

通行体に改め、踊り字はすべて「々」とした。

## 執筆者紹介

- 小山 正文（研究顧問）  
新野 和暢（客員研究員 名古屋大谷高校教諭）  
市野 智行（客員研究員 本学非常勤講師）  
木越 祐馨（加能地域史研究会代表）  
藤井 由紀子（所員）  
中川 剛（客員研究員 愛知学院大学 博士課程後期）  
高木 祐紀（客員研究員）  
小川 徳水（西厳寺住職）  
工藤 克洋（客員所員 京都産業大学史編纂室嘱託員）  
松金 直美（客員所員 真宗大谷派教学研究所助手）  
脊古 真哉（客員所員 本学非常勤講師）

### 同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号

平成二十九年三月二十五日 印刷

平成二十九年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一  
編集者 同朋大学佛教文化研究所

幹事 安藤 弥

電話 ○五二―四一―一三三七

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 株式会社 カミヤマ